「すべての認知症が不治の病ではない」という基本理念で

先端機器を完備しニーズを取り入れ認知症患者の退院を実現する認知症専門病院「トワーム小江戸病院」

「患者さんのニーズに合わせた病院を」と話すのは医療法人社団・松弘会理事長の済陽輝久（わたようてるひさ）氏。小江戸・川越（埼玉県）で認知症専門病院「トワーム小江戸病院」を開院して３年が経つ。「認知症患者を介護するだけでなく、治療して改善する」ことで、700名を超える患者を退院させた同病院のさらなる進展とは？

わたよう・てるひさ

1975年東邦大学医学部卒業。78年まで同大学整形外科で勤務。日赤医療センター麻酔科、磯子中央病院勤務を経て、85年に三愛病院設立、院長に就任。総合診療科、整形外科を担当。97年医療法人社団松弘会理事長に就任。日本麻酔科学会麻酔科認定医、ガンマナイフ認定医、身体障害者認定医など。

医療法人社団松弘会の沿革

1985年 4月	理事長　済陽輝久が三愛病院を設立
1986年 10月	救急指定病院となる
1992年 3月	MRI導入
1997年 4月	医療法人社団松弘会　三愛病院となる
2003年 12月	MRI機種変更（1.5テスラ：高傾斜磁場／シーメンス製シンフォニー／全国４台）
2004年 9月	ガンマナイフセンターオープン
2006年 4月	介護老人保健施設『トワーム熊谷』開設（100床）
2006年 7月	介護老人保健施設『トワーム指扇』開設（100床）
同	介護付有料老人ホーム『トワームみずほ台』開設（48室）
2008年 6月	認知症専門病院『トワーム小江戸病院』開設（200床）
2010年 8月	三愛病院にMRI1.5タイプ（GE製）導入
2010年 12月	トワーム小江戸病院に日本最新バージョンの3.0テスラMRI（GE製）を導入
2010年 12月	アーカンソーハートホスピタルと提携

「医療の基本は〝治す〟ということ。そのためには最先端の診断設備が必要なのです」――。済陽氏は医療の原点をこう語る。

埼玉県さいたま市桜区で「三愛病院（126床）」を経営している松弘会が立ち上げた「トワーム小江戸病院（200床）」は2008年6月1日に開院し入院・外来・重度認知症デイケアなどの医療を行う。

通常、認知症患者はグループホームなどの介護施設で対応することが多い。一方で、身体疾患を併発した医療必要度の高い認知症患者は介護施設では対応が難しい。また、精神科病院は、身体疾患の診療体制が総合病院に比べて整っていないところもある。

しかし、トワーム小江戸病院では「24時間、365日、患者さんの診断から治療まで一気通貫の診療体制が整備されている」（済陽氏）。先端医療機器が設置され、合併症の迅速かつ適切な検査・治療の実施が可能なのである。

日本初の最新システム（オプティマエディション）を搭載したMRIやマルチスライスCT、さらにはSAS（睡眠時無呼吸症候群解析器：日本初）といった一般の認知症病院では見かけない機器を完備。ドッグセラピーや東邦大学と提携した音楽療法など認知症に対する治療法も多岐にわたる。医療スタッフは医師18名、看護師60名、看護助手70名リハビリ関係10名、臨床心理士3名の他、検査、医療事務員も含めて総勢約220人体制となっているが、特記すべきは通常、認知症病院では見られない理学療法士がトワーム小江戸病院では治療→退院を前提としているため3名在籍しており、リハビリ室にも歩行訓練のための機器がそろっている。

現在、松弘会は日本医療機能評価機構認定・救急病院の三愛病院と、さいたまガンマナイフセンターを核として、超高齢化社会に対応すべく、介護老人保健施設「トワーム熊谷」「トワーム指扇」、介護付有料老人ホーム「トワームみずほ台」を展開。

患者の尊厳を重視し、愛情込めた医療の提供を目指す「トワーム小江戸病院」

米アーカンソーホスピタルと懇親交流を深める

しかし、最先端の機材を導入することも大事だが、病院経営や人材育成も重要。

そこで松弘会は昨年循環器分野に強く患者満足度で全米トップクラスの「アーカンソーハートホスピタル（AHH、アーカンソー州、病院長ブルース・マルフィー医師）」と提携し、以後同病院はその日本法人を通じて、松弘会に対して、若くて優秀な医師の採用支援やスタッフへの継続的研修実施、効率的臨床ワークフローの開発支援などを行い、松弘会は患者主体の効率的な診療・経営ノウハウを得ている。

米国GE社製の最新型3.0テスラMRI

すべての認知症が良くならないわけではない！

「すべての認知症が治らない病気ではない」――。これが30余年、医師として認知症に向き合ってきた済陽氏の理念だ。

バラエティに富んだ治療法が患者の症状に合わせて施されているが、施設自体にもくつろぎと安らぎを追求すべく工夫がなされている。病院の建設費や設備費などには合計22億円を充て、院内にシャンデリアや高級家具などを配し、ホテル並みの心地よさを実現させ、患者のストレスを軽減。病院のロビーも天井を吹き抜けにして患者の家族が安心して家族をあずけられる温かい雰囲気をつくっている。

済陽氏は次のように語る。

「長い間、三愛病院で診ていた患者さんが認知症を発症してしまうと、その患者さんは介護施設に移され、患者さんと病院とのつながりが切れてしまいます。そのため、必要な治療を受けられないまま亡くなってしまうという状況がありました。これを解消し、最期まで患者さんの治療に当たる。これこそが医療です」。

そして同氏の理念を具現化する上で、急性期病院である三愛病院と介護老人保健施設「トワーム指扇」「トワーム熊谷」「トワーム みずほ台」、そして「トワーム小江戸病院」とタイプの違う病院施設がそろっていること、そしてその医療連携が密であることが非常に大きな強みとなっている。

玄関前にバス停、夏祭り、花火大会の提供……

一方で、サービス面の充実についても手を緩めない。10年5月1日より東武バスウエストの協力の下、同院玄関前にバス停留所「トワーム小江戸病院」を設置。路線バスの民間施設への乗り入れを実現させた。

8月には〝昔ながらの夏祭り〟をテーマにした盆踊りや御神輿、ボランティア団体による民謡演奏会を実施。

また同院で独自に打ち上げ花火（スターマイン）560発を打ち上げ、患者をはじめ、その家族に夏の風情を楽しんでもらった。

また、昨年12月24日には患者の早期回復を願うキャンドルサービスを実施。看護科やリハビリテーション科などの職員がキャンドルを手に誓いの言葉を述べて祈りを捧げ、入院患者へクリスマスプレゼントを配った。

介護医療が儲けにつながらず、職員の負担も大きいと言われる中で、医療の原点を共有し、新たな仕組みで認知症患者を治療するトワーム小江戸病院は4年目に入りまさしく第二ステージへと進化している。

夏祭りで打ち上げ花火（スターマイン）560発を中庭で打ち上げ

看護師をはじめとするスタッフがキャンドルサービス